

『デンドロカカリヤ』論

——《植物病》の解明を中心に——

田 中 裕 之

はじめに

『デンドロカカリヤ』(初出「表現」昭24・8)は、安部公房の変形譚第一作に当たる。そのため、安部の初期短編の中では最も重要視されることが多く、本作品が花田清輝の理論を實踐に移した作品であることや、安部のコミュニズムへの接近を最初に窺わせる作品であることが、これまでに指摘されてきた。また、主人公が《政府の保証》付きの植物園に收容される、という最終場面を通して、国家権力の下に取り込まれ、管理されることに対する安部の嫌悪が表明されていることも、間違いないまい。しかし、問題はまだ残っている。それは、主人公を植物に変えてしまう《植物病》とは何か、という問題である。

たとえば、松原新一氏は、《人間の植物化イコール自己喪失》とし、《なんらかの共同体に帰属することが、「政府の保証」つきのような「平穩」を個人にもたらずとしても、それと引きかえのよう⁽¹⁾にして人は自己を失わなければならないというわけだ。》と論じている。つまり氏は、植物への変形を、共同体への帰属がもたらすものと捉えているのである。しかし、作品では、植物園への收容によつて初めて、主人公が植物へと変形するのではない。《植物病》にかかった主

人公が、植物園長に付け狙われるのである。ここに認められる因果関係は、全く逆である。《植物病》の意味が解明されねばならない。

もっとも《植物病》に係る発言が、これまで皆無であつたわけではない。本作品執筆当時の安部の理論上の師とされる、ほかならぬ花田清輝自身は、植物に変形した状態を、《なまけたり、のらくらしたりすることの居心地のよさ》の中⁽²⁾にいる状態、すなわち、《デカダン》に陥つた状態と見ている。花田は《植物病》を、人を《デカダン》に導くものとして捉えていたことにならう⁽³⁾。

本稿では、花田の見解の検証をも含めて、植物園長に主人公を付け狙わせる原因となつた《植物病》とは何を意味しているのかを中心に論じてみたい。

なお、本作品には、昭和二十七年十二月刊行の短編集「飢えた皮膚」収録の際に、改訂が施されており、先に引用した二つの評言は、いずれも、その改訂版についてのものである。しかし、この改訂は、《植物病》の意味や(改訂版では《植物病》という言葉そのもの⁽⁴⁾はでてこないのだが、それと密接に係わる本作品の主題の改変にまでは及んでいないと考えられる。改訂版では、初出版に見られる、語り手《ぼく》による《植物病》の解説が省略されるなどして、作品が、より簡潔にまとめられていると言えるが、それは逆に、初出版

の方に、《植物病》の意味を説明する手掛かりが多いということでもある。そこで本稿では、初出版に拠って分析を行うことにする。

一、《植物病》の意味（二）——自己閉鎖への逃避——

「デンドロカカリヤ」は、《コモン君がデンドロカカリヤになつた話》であり、コモン君の友人である《ぼく》が、コモン君の身に起こつた出来事を語る、という形式の下に作品が構成されている。

作者の代弁者としての役割をも担っている語り手《ぼく》は、人間の植物への変形を、《植物病》によるものだと言い、《これはもう病気といふより、一つの世界、とくにぼくらの世紀のね》とも言う。主人公である友人の名前が《コモン》(Common)であることから明らかのように、《ぼく》は、植物への変形という事態を、なんら特殊なものではなく、多数の人々に起こり得るものとして認識しているのである。そしてこれは、安部が、本作品を、多くの人々が経験し得る一つの寓話として描いているということでもある。では《ぼくらの世紀の》《一つの世界》とも言われる《植物病》とは、何を意味しているのか。まずは、コモン君が実際に変形する場面を中心に見ていきたい。

コモン君の変形は、作品の最終場面を含め、計四回描かれる。以下、最終場面を除く三回の変形の場面を見ていくことにする。

第一回目の変形は、コモン君が道端の石を蹴飛ばした時に、《何故蹴つてみようなどといふ氣になつたのだらう?》と考えたことから始まる。

《ふと意識すると、その一見あたりまへなことが、如何にも奇妙に思はれはじめた。》(略) 思はずあたりを見まはして、他の人もそ

んなことをするものかどうか、そつと確かめてみたりする。確証がなくても、なに、誰だつて知らず知らずのうちにしてゐるさと、後味の悪い独り合点をしたとたん、二三歩先ころげていつた石ころを、こんどは別な足が蹴つてゐるのさ。ざつと音をたてて、意識が軽い断層の模型をつくる。》

コモン君の話を語り始める前に、語り手は、《ぼくらはみんな、不安の向ふに一本の植物をもつてゐる。》とも述べているのだが、ここに語られているコモン君の姿にも、自己の行為に理由付けができないことから来る不安、つまりは、自分自身に対する信頼を失つた不安を見ることができる。そして、コモン君は、この不安感を契機に、これまでは内から外へと滑らかに向かつていた意識に《断層》をきたしたのである。この時、彼は《路端の石を蹴つて驚き、想出せぬものを想出さうと努めながら、断層の鏡に映つてゐる自分を見詰めてゐる自分を見詰めてゐる自分を……》という、《二枚の鏡に映つた無限の像》を見る。これは、変調をきたしたコモン君の意識が、自己の内面のみに向かい、閉ざされてしまつた様を示していると考えられる。この直後に、《コモン君はふと心の中で何か植物みたいなものが生えてくるやうに思》い、植物へと変形するのだが、変形に際して顔が裏返しになるとされてゐるのも、同じことを示していよう。《意識が逆に顔の指向性を辿つ》たわけである。植物への変形は、このように、不安感を契機に、意識が外界から切り離され、自己の内面に向かつた時に起こるのである。

植物と化した時、コモン君は《奇妙に高まつてきた心持良い不快感》を感じるのだが、それを受け入れず、《むしるやうに顔をほぎとると、表返》す。すると《瞬間、すべてはもとに戻つてゐる。》こ

こで、植物への変形が、コモン君に《心持良い不快感》を与えていることを確認して、第二回目の変形へと移りたい。

第二回目の変形は、一年後に、《珈琲舗、カンラン》で起こる。

《あの人》の下から連れ去って欲しいという、K嬢からの手紙を受け取ったコモン君は、指定された場所《カンラン》(この名前からは、橄欖・甘藍・寒蘭といった植物を連想することも可能である)で、彼女を待つ。

K嬢を待っている時が《コモン君の一生で一番幸福な瞬間だった》のだが、K嬢が現れる前に《あの人》が現れ、コモン君の前の席に腰を下ろしてしまふ。《あの人》の《何から何まで知り抜いてゐるといつた顔つき》を目前にしたコモン君の様子は、次のように語られる。

《いや、そんなはずはない、俺の顔だつて知るはずがないぢやないかと、一応は何処かで打消しても、すぐ別なところで、相手はすべてを知つてゐるのだといふ自分にも分らぬ、そのくせ分ればもつともだと納得するにちがひないらしい、すくなくもさう思はれる論理みたいなものが、によきによき生えてくる。》

ここには、第一回目と同じく、自分自身への信頼を失つた不安感がある。彼は、《よし、どんなことがあつてもK嬢をあの人から守らなければならぬ。》と、自分を奮い立たせる。しかし、やがて、《ともすれば意識が遅れがちに思はれだし》、《すべての動きが追いつけないのである意識の中にぼんやり動きのままの尾を引く》という状態に陥る。変形に先立って、意識が外界から切り離され始めているのであり、この点も、第一回目の変形と同様である。

K嬢を守る自信が揺らぎ始めた彼は、《緑化週間》のポスターに見

入っている自分に気付き、《益々自信を失》う。そして、次の瞬間、再び変形が始まる。

《どうしたんだ。きつと疲れたんだ。》

思はず空を見上げてゐた。

さう、空を見上げてゐたんだ。《略》地球がどろどろと鳴つてゐた。気持のよい飽和感の酔ひ、さうなんだよ。たうとう発作が始まつたんだね。》

この変形の際には、《天が眼の中へ流れ込》んだり、指の中で《熱い太陽が燃えてゐ》たりもするのだが、これらの点については後に考察することとして、ここでは、コモン君が《気持のよい飽和感の酔ひ》を感じていることに注目しておきたい。彼は、第一回目の、快・不快が共存した《心持良い不快感》にかわつて、快感のみを味わつてゐるのである。この変化は、この度の変形が、疲れの後に起こつたものであることに因ると考えられる。

《あの人》を前にしてK嬢を待っている間に、コモン君が次のように考える箇所がある。

《時間に一応の結び目が出て、切角生活に支へが見つかつたやうに思つたのに、やはり無償ではすまされぬのが運命なのか。運命は聞ひとらなければならぬ、といふ文句も、あながち無縁ではなくなつた。》

コモン君は、《生活に支へ》を得るために、《あの人》とK嬢を会わせてはならなかつた。ところが、彼は、彼を圧迫する《あの人》との対峙、すなわち、《生活に支へ》を得るための《聞ひ》に疲れしてしまったのである。疲れの後では、意識が外界から切り離されることによる植物への変形は、快いものとして感じられるのだと言えよう。

(この点は、第三回目的変形の際、より明確に示される。)

植物に変形したコモン君は、またしても、顔を表に返すことで人間の姿に戻るのだが、その時にはすでに、K嬢との約束の時間は過ぎており(あの人)もない。

第三回目的変形は、この後、(恥ぢらひと絶望にうちのめされて)《逃げるやうに店を出た》コモン君が、(丘の上の焼跡で、こげた堀ばかりがつづいてゐる)場所の近くに到つて、《広告塔の言ふとほりぢやないか、わたしち廃墟の心に……、ここで一本の植物になり果てよう。》と考えた時に起こる。

《広告塔の言ふ》言葉とは、次のようなものである。

《「たゞいまは緑化週間です。御通行のみなさん、おたがひに樹木を愛しませう。植物は、わたしち廃墟の心に調和を与へ、街を清潔に、美しくするものです……」》

《広告塔》が《樹木を愛しませう》と言っているのに対し、コモン君は、自ら《植物になり果てよう》とするわけだが、それはともかくとして、ここでは、《廃墟の心》なるものが、変形の前提になつてゐるのである。人間を植物に変形させる《植物病》は、《ぼくらの世紀の》《一つの世界》ともされてゐた。したがつて、この《廃墟の心》とは、二十世紀に生きる人間に共通な精神状況を意味するもの、ということになる。

作家活動を開始した当初、安部がハイデッガーやヤスパースの強い影響下にあつたことは、よく知られてゐるが、彼らの思索や哲学の根底には、現代に生きる人間が、科学技術の高度な発達の中で大衆化・平均化されることにより、確かな存在基盤を失つてゐるといふ認識がある。《廃墟の心》が意味しているのは、この、存在基盤を

喪失した現代人の精神状況にほかなるまい。安部は、ハイデッガーやヤスパースと同様の時代認識を持つて、本作品を執筆したものと考えられるのである。そして、この度の変形の舞台となる、(丘の上の焼跡で、こげた堀ばかりがつづいてゐる)という終戦直後をイメージさせもする場所は、《廃墟の心》を持つ人間が行き着くにふさわしい場所なのだと言えよう。この《廃墟の心》が、これまでの変形の際に、常にコモン君の心情として認められた、自分自身への信頼を失つた不安に繋がるものであることは、言うまでもない。第二回目的変形の際には、コモン君が《生活に支へ》を持つていないことが語られていた。彼が会社を辞してまでK嬢との関係の中に求めようとした、この《支へ》とは、むしろ、精神的・内面的なそれである。《支へ》を得ようとするコモン君の努力は、《廃墟の心》を埋める存在基盤獲得のための努力であつたと言えるのである。

さて、先に述べたように、第三回目的変形もまた、疲れの後に起こる。先に触れた場所(急に)に到つて、《急に疲れを覚へて立ち止まった》コモン君は、裏返りたがる顔を押しさえながら、顔を捨て去つた後に残るであろう《原・顔》について考へる。しかし、《顔を投捨てて、原・顔だけ残すなんて、不可能》であり、ましてや《原・顔》など《非存在》であると気付いた時、彼は、《急にぐつたりと、疲れが増して》、植物化を受け入れるのである。

《さう決心してしまへば、植物になることも、やはり一種の快感なんだよ。何故植物になつてはいけななんだ! ドウイノの悲歌の九番に、こんな詩句があるのを知つてゐる?》

ただ、この世のはかなさをすすすためなら
何故? とりわけほの暗い緑の中で

葉の縁々に小さな波形を刻む

月桂の樹であつてはならないのか？

リルケの詩編を引用しながら語られているのは、コモン君の諦めであり、主体的行動の放棄である。存在基盤を獲得することができないままに疲れ果て、諦めとともに意識を外界から切り離れた時、すなわち、自己閉鎖への逃避によって非社会的な自足状態へと陥ることを決意した時、コモン君は、(一種の快感)とともに、植物に変形したのである。第一回目、第二回目の変形の際には、コモン君の意志に係わりなく、彼の意識は、いつの間にか外界から切り離されていた。つまり、彼は、不安感から逃れるために、知らず知らずのうちには自閉的な状態に陥っていたのである。そして、そのことに気付いた彼は、自分自身を恥じ、また、再びその状態に陥ることを怖れてもいた。しかし、第二回目の変形の際に、自閉的な状態に陥ることの快さをも知った彼は、この第三回目の変形に当たっては、自らの意志で、その状態に陥ることを選んだのである。

植物への変形という症状をもたらす、(ぼくらの世紀の)一つの世界」とも言われていた(植物病)とは、このような、対社会的な関心を遮断した、自己閉鎖への逃避を意味していると考えられる。そして、コモン君が陥った、この自閉的で非社会的な自足状態を、花田が指摘したように、(デカダン)と呼ぶこともできるであろう。

二、(植物病)の意味(二)——ブシコノイローゼ——

次に、実際の変形の場面から離れ、(ぼく)の(植物病)についての解説や作品のその他の部分と、安部のエッセイとを突き合わせてみる。

安部は、本作品と同年に発表されたエッセイ「シュールリアリズム批判」⁽⁵⁾の中で、ブシコノイローゼ(精神神経症)について触れ、次のように述べている。

(これは大別してヒステリーと神経質とに分類される症候群であり、疾患というよりは三浦崑栄博士の主張のごとく、まさに(一個の世界)であると考えられ、更にすべての人間に現われうる外界刺激に対する一反応現象、あるいは反応する人間の傾向であると考えるのが最近の学説である。)

ここでまず、ブシコノイローゼが(一個の世界)とされているのが注目される。続いて安部は、(ブシコノイローゼに特有な且特有な症候というものはほとんどない、とも述べているのだが、これは、(植物病)にかかった人間が、すべてデンドロカカリヤになるわけではなく、(そり反つたのや、いぢけたのや、とろけるやうに垂れ下つたのや)等々、様々な植物に変形していることに繋がるものとも考えられる。

さらに、安部は、ブシコノイローゼとは、(意識と、絶えずその監視検閲を受けている無意識との矛盾、内的軋轢)であるとし、次のようにも述べる。

(ところで第二系と第一系、すなわち意識と無意識界とは無関係に成立したのではない。始めは外界に対して極めて合理的な密であった。しかし、社会的現実には常にその関係に対して合理性を保つように動いていきはしなかった。神経の型による個人差を超えた抵抗(内的軋轢)が現われてくることがあった。大多数の人間(民衆)がその抵抗を共通の社会的現実として受取らざるを得ない時があった。例えば自律的経済である資本主義の下にある民衆

の社会的現実のごとく。そして、その意識と無意識とのアンバランスが、我々を取りまく様々な現象なのである。抑圧階級の圧制が意識では検閲し切れないほどの刺戟を無意識界に与えた場合、バランスはついに破れる。精神深層作用は露呈あるいは爆発せざるを得ない。従つてブルジョア道徳はこの深層作用を反社会性と呼び、その露露を恥ずべきものとして極力抑圧しようとするが、しかし逆に（ある特定の）社会の反深層作用性と考えられるがむる妥当ではないだろうか。むしろ深層作用そのものは極めて個人的・非社会的であるにしても、決して反社会的であるわけはなく、上層作用（意識作用）とのバランスに於て充分社会の中に安定しうる筈のものである。事実すべてのプシコノイローゼは刺戟から脱し、バランスを取戻せば直ちに異常反応を中止する。』

長い引用になつてしまつたが、ここで述べられていることは、作品中の「ぼく」による「植物病」の解説と重なるものである。「ぼく」は、「植物病」の患者が、自分の病気を「恥のやうに思つて、隠すんだ。」と言ひ、「加害者はむしろ君自身さ。存在せずに、君をとりまき、君の顔から滲みこんでくるあの君自身さ。」と言ふ。「加害者」たる「君自身」とは、絶えず「無意識」を「監視検閲」する「意識」のことである。人々は、「ブルジョア道徳」の中にあつて、その規範に従わせようとする「意識」の「監視検閲」を脱した、「精神深層作用」の「露呈あるいは爆発」を恥じるわけである。この「精神深層作用」の「露呈あるいは爆発」が、強迫神経症やヒステリーであるわけだが、安部は、このエッセイにおいて「ヒステリー患者が詐病の対象として精神分裂症の精神を選」ぶことにも触れている。この点は、本作品で、この後、コモン君を付け狙うことになる「H植物

園長」の、

「私の考へでは、植物とは精神分裂とアナロジードと思ひますな。現代のホープです。植物は現代の神々であり、数多のヒステリー共が信者になつてそれに倣ふといふわけせう。」
という言葉に通じるものである。

このように「シュールリアリズム批判」を参考にすれば、「植物病」とはプシコノイローゼを意味し、植物に変形した状態は、精神分裂病的な症状を呈している様を示していることになる。そして、精神分裂病とは、「外界の刺激に函数的に反応」するのではなく、「外界との関係なしに」いっぺん刺激があると、あとは球がころがるみたいにかつてに「表出活動が起こるものであるから、これは、完全なる外界との断絶であり、決定的な自己閉鎖だとも言えるだろう。」

ここで、前節で保留しておいた、第二回目の変形の際に、「天が眼の中へ流れ込」んだり、指の中で「熱い太陽が燃えてる」たりすることについて考えてみたい。

作品の冒頭でも、語り手「ぼく」が、次のように述べている。
「空を見上げてごらん。眼には見えないラッパのやうな管が、君の眼からするする延びて、天に向つて拡がらなかつた？　そして天が一杯、君の眼に流れこみはしなかつた？」

「なんなら眼を閉ちてごらんよ。そして思ひつきり背のびして、両手をぐつと抜げるのさ。指先で力一杯さはつてごらん。何があつた？　碎けるやうに熱いもの？　さうだろう。太陽なんだよ。いくつ？　指の数だけ。さうだらう。眼を閉ちたら、太陽は丁度指の数だけになるんだよ。」

また、前節では触れなかつたが、第三回目の変形の際に見られる

次のような状態も、(天が眼の中へ流れ込む)ことによるものであろう。
(今度ははつきりと自分が植物になつてゆくのが感じられた。といふより、外界の一切が自分になり、ただ自分でない、しかも今まで自分だつた管のやうな部分が植物になるのだと思つた。)
(植物病)がプシコノイローゼを意味していると見た時、これらは、プシコノイローゼによる精神分裂病的症状を表すものとして理解されるのである。

まず、(天が眼の中へ流れ込む)ことについては、「名もなき夜のために」(昭23〜24)に見られる、主人公(僕)に(発作)が起きる時の、次のような描写が参考になる。

(屋根をすべり落ち、街路樹をゆすり、落葉をかき集めては町角を右に左に流れて行く風の音が、ふと鳴り止んで僕の心臓のざわめきのやうに思はれ始める。と、その物憂いリズムは理もなく水面上に広がる波紋のやうに細くふるへながら僕の外殻を繰りひろげ、一切の心象を一つ／＼意味の世界から解き放つ。そして最後に宇宙全体が僕の眼球であり、その中を隈なく走り巡る毛細血管のざわめきであるやうに感じられた刹那、突然異様な感覚が、右足の拇指の先からじわじわと匂ひ上つて来る。)

この描写は、先に引用した「デンドロカカリヤ」の変形時の描写に繋がるものであろう。ここでも、(僕の外殻)が(繰りひろげ)られ、(宇宙全体が僕の眼球であり、その中を隈なく走り巡る毛細血管のざわめきであるやうに感じられ)ると、(外界の一切)を自分自身の肉体であるかのように感じる様子が描かれている。この、(僕)の(発作)は、医者のお話によれば、(脳の表面に出来た粟粒のやうな淡桃色の腫瘍)によるものであり、精神の疾患というよりは脳障害に

よるものなのであるが、症状として精神に異常をきたすという点においてはプシコノイローゼと同様である。そして、(僕)は、この(発作)を、(何かのはづみに僕を地面から引きさらつて行く)ものだとしていたのだが、コモン君も、第一回目の植物への変形の際に、(どこかへ引きさらはれてゆく感じ)を受けている。この様な類似点からして、先の変形時の描写もまた、精神分裂病的症状を示していると考えられるのである。そして、そもそも、自己と外界との境界の不明瞭化は、精神分裂病や薬物使用時の顕著な症状の一つとして挙げるのできるものなのである。

では、指の中で(熱い太陽が燃えてゐる)ことについてはどうであらうか。これに対応する描写は、「名もなき夜のために」の(発作)の場面には認められない。水永フミエ氏は、この(太陽)を、後にコモン君が希求することになる(人間の圧制者)への抵抗のシンボルとしての(新しい、もつと激しいプロメテウスの火)に結び付け、本作品における植物への変形はマイナスの意味でのみ捉えるべきではない、との見解を提出している⁽⁸⁾。しかし、これまで見てきたやうに、植物への変形をプラスの意味で捉えることはとてできない。この指の中の(熱い太陽)もまた、他の描写と同様、精神分裂病的症状の一つを示すものと考えるのが妥当であらう。

ヤスパースは「精神病理学総論」において、精神分裂病的症状の一つとして(幸福感の異常)を挙げており、その症例の中には、太陽との一体化によつて至上の幸福感を味わうというものが見られる。コモン君もまた、第二回目、第三回目の変形の際に、(氣持のよい飽和感の酔ひ)、(一種の快感)を感じていた。指の中の(熱い太陽)は、コモン君の(幸福感の異常)をこそ示していると考えられるの

である。安部がヤスパースに影響を受けていることや、医学部の出身であり、(戦後)医学をすてたが、もしつづけるとしたら精神科をやるつもりだった(9)らしいことを考えるなら、彼が、この(幸福感の異常)についての知識を持っていたことは、充分に想定し得る。そして、本作品執筆の際に、(幸福感の異常)の症例の中から、ほかならぬ太陽との一体化が選ばれたのは、それが、植物に変形した人間に最もふさわしいからであるだろう。また、変形時のコモン君の視線・身体が、この(太陽)をも含めた天空へと向けられることには、彼が無意識裡に望んでいる解放の方向性が暗示されてもいるだろう。

※

《植物病》は、自己閉鎖への逃避とプシコノイローゼとの、いずれをも意味していると考えられるのである。安部がそれらを《植物病》として描いたのは、それらの結果として《デカダン》に陥った人間や、精神分裂病的な症状を呈した人間に認められる非行動性・閉鎖性・自足性といった特徴が、植物を連想させるからにほかなるまい。そしてまた、ともに外界との断絶という結果をもたらすこの両者は、「シユールリアリズム批判」において、プシコノイローゼによる症候が、《芸居のポーズ》にはかならず《疾病への逃避》の様々な現れにすぎないとも述べられていることからすれば、明確な境界線をもって区別することが困難なものだとも言えるのである。

三、《日植物園長》への抵抗・コミュニケーションへの接近

以上、本作品における《植物病》の意味を明確にすべく作品分析を行い、《植物病》が、自己閉鎖への逃避とプシコノイローゼとのいづれをも意味している、という結論を得た。

しかし、安部の主眼が、単にこれらを《ぼくらの世紀の》(一つの世界)として、すなわち「世紀病」として読者に提示することにあつたのではないことは、言うまでもない。安部の眼は、これら「世紀病」の原因である社会条件に向けられているのであり、その社会条件に対して安部の取ろうとする姿勢が、コモン君と《日植物園長》との対決の様相を語る《ぼく》の言葉を通して示されるのである。以下、前節までの考察を踏まえた上で、この点について見ていくことにする。

第三回目の変形の時(このまま植物になつてしまはうと、コモン君はすつかり決心してた)のだが、《日植物園長》が彼を採集しようとしたため、全くの偶然から、再び人間の姿に戻る。そして、これ以降、コモン君と、彼を付け狙う《日植物園長》とのドラマが展開されることになる。

コモン君は、《日植物園長》に付け狙われながら、自己の《植物病》の原因を究明しようとする。ダンテの「神曲」に、また、「ギリシャ神話」に、その原因を探ったコモン君は、ついに、次のような結論に至る。

《結局、植物への変形は、不幸を取除いてもらつたばかりに幸福をも奪はれることであり、罪から解放されたかばかりに、罰そのものの中に投込まれることなんだ。これは人間の法律ぢやない、ゼウスの奴隷たちの法律だ。新しい、もつと激しいプロメテウスの火がほしい!》

植物への変形は、《人間の圧制者》である《ゼウス一族》の仕業だとコモン君は考えたのである。前節で引用したエッセイ「シユールリアリズム批判」において、安部は、プシコノイローゼの原因であ

る「意識」と「無意識」とのバランスの破壊をもたらすのは、「抑圧階級の圧制」だと述べていた。また、人をして自己閉鎖への逃避に至らしめるのも、人間を取り替え可能な一つの歯車とし、存在基盤を喪失させる、科学技術の高度に発達した現代資本主義社会にはかならない。コモン君は「植物病」の原因が社会条件に、「抑圧階級の圧制」にあると気付いたのである。

植物への変形によって解放される「罪」、「不幸」とは、対社会的な関心の遮断である（デカダン）によって逃れることのできる、存在基盤喪失の不安感であり、また、精神分裂病的な症状によって逃れることのできる「意識」と「無意識」との「内的軋轢」であろう。そして、「罪」からの解放の代償として投げ込まれることになる「罰」、「不幸」を取り除かれる代償としての「幸福」の喪失とは、植物への変形そのものではなく、変形がもたらす、奴隷状態への転落を意味していると考えられる。コモン君が、「人間の圧制者」ゼウスの使ひ）であり、自殺者の樹々をさいなむ怪鳥アルピイエ）であることと見なす「H植物園長」は、次のような言葉で、コモン君を誘うのである。

「つまり、私は、あなたにH植物園の一室を呈供しようつていふわけなんですよ。(略)まあ極楽ですな。それに、政府から保証されてゐます。どんな危害をかうむることもありません。現に植物になつた沢山の人が、私のところで一番平穩に暮してゐます。」
「いやいや、幸福ぢやなくつたつて……、幸福だの不幸だのなんて、一体何んの役に立つんです。どうでもいいぢやありませんか。要するに、ますます純粹に、豊富に存続しつづけるといふことが問題なんでせう。さうぢやないですか。」

「政府の保証」という言葉を口にしながら（この言葉は、計三回

繰り返される）、コモン君に自分の下への帰属を促す「H植物園長」は、国家権力そのものを象徴する存在とも、国家権力と繋がりのある、悪意ある精神病院長とも見なし得る。国家権力が「抑圧階級」と分かち難く結び付いたものであることは、言うまでもない。「植物病」たる自己閉鎖への逃避によって（デカダン）に陥つた人間は、国家権力によって管理されるべく組織されてしまふ。彼らには一応の拠り所が与えられ、「ますます純粹に、豊富に存続しつづける」平穩を保証されるものの、その代償として奴隷状態に置かれることになる。そしてこの時、その人間の自律性は失われてしまふ。また、「植物病」たるプシコノイローゼによって精神分裂病的な症状を呈すれば、精神病院に收容される。この場合でも、やはり、その人間は、「ますます純粹に、豊富に存続しつづける」だけの他律的な存在となる。いずれの場合にせよ、非行動・閉鎖・自足といった植物的な状態に陥つた人間を待っているのは、まさに植物園の植物のような他律的な存在様式への転落なのである。

「植物病」の原因を突き止め、変形がもたらす結果にも気付いたコモン君は、「H植物園長」の誘ひ掛けを退け、植物への変形を拒否しようとする。彼は、「H植物園長」を殺し、植物となつて閉じ込められている人々を救い出そうと植物園に向く。しかし、結局は、「H植物園長」の思い通りそこに收容されてしまふ。⁽¹⁰⁾この結末は、コモン君が精神病院に收容されたものと見ることもできる。また、これを、コモン君が国家権力の下に組み込まれたものと見て、本作品を、迫り来る政治の右傾化の中で、敗戦によりいつたん国家権力から解放された人々が、再び台頭してきた権力によって再組織されていく様を描いたものと捉えることもできる。

コモン君は、《日植物園長》に敗れ、植物園に収容された。しかし、本作品は、資本主義社会の中での、また、国家権力の前での、無力な個人の姿を描き出したにとどまるものではない。そのコモン君に對して、語り手《ぼく》は、次のように言う。

《ああ、コモン君、君が間違つてゐたんだよ。あの発作が君だけの病気でなかつたばかりか、一つの世界と言つてもよいほど、すべての人の病気であることを、君は知らなかつたんだよ！ そんな方法で、アルビエを亡ぼすことは出来ないんだよ。ぼくらみんなして手をつながなければ、火は守れないんだよ。》

《火》とは、《ゼウス一族を山上から逐放するために送られた》《プロメテウスの火》を指している。ここに窺われるオプティミズムは、近年の安部の姿勢とはかけ離れたものであるが、《人間の圧制者》に抵抗するための、すなわち、《抑圧階級の圧制》を打ち破るための連帯を呼び掛ける、この《ぼく》の言葉の背景には、従来指摘されてきた通り、明らかに、本作品執筆時における、安部のコミニズムへの接近があらう。

おわりに

『デンドロカカリヤ』は、人々が確かな存在基盤を喪失し、《ブシコノイローゼ的現実が社会的現実になつた》（「シユールリアリズム批判」）時代状況の中にあつて、このような状況をもたらした原因を既存の社会条件に見た安部が、それを破壊するための連帯を呼び掛けた作品である。

安部は、本作品に先立つて、《人類の敵》を自称する《僕》と、既成秩序の代弁者であり、《僕》の《超自我》の実体化された存在とも

解される《X》との相克を描いた作品「異端者の告発」（昭23）を執筆している。この作品では《僕》は《X》を殺そうとするものの、果たせず、結局は、巡査に説明した《X》の容貌が、ほかならぬ《僕》のそれであつたことなどから、《氣狂ひ》として《瘋癲病院》へ閉じ込められてしまう。

『デンドロカカリヤ』は、心理学・精神病理学的な発想を用いているという点では「異端者の告発」の後を受け継ぐものであり、主人公を《異端者》から《コモン》とするとともに、抑圧の問題を、一個人の内面の劇に重点を置くのではなく、社会的な問題としての側面に重点を置いて描き、さらには、既成秩序に對抗するための連帯を呼び掛けたという点では、「異端者の告発」の主題を發展させた作品なのである。

注

- (1) 「否定の精神——安部公房小論」『作家の世界・安部公房』
番町書房、昭53・11所収。
- (2) 本作品を、《人間の自発性の喪失、馴致と類型化による非人間化（ここでは植物化）をあつかった》ものとする、本多秋五氏の見解（「変貌の作家安部公房」『週刊読書人』昭37・1・22頁3・12号）も、松原氏のそれに繋がるものであらう。
- (3) 筑摩書房「新鋭文学叢書2安部公房集（昭35・12）解説」。
- (4) 鈴木三郎氏は、理想社「ヤスパース選集1実存哲学」（昭51・6、新増訂三版）の「ヤスパース解説」において、次のように述べている。

《技術の高度に發達した現代資本主義社会の機械化生産様式

に依じて組織化された経済・政治機構の中で全くこれに依存して生きるしかない我々の現存は、誰とでも取替えのきく機構の一機能にまで「水平化」された「大衆」の一人にすぎず、独立せる人格としての「自由」の可能性は抹殺されようとしているのである。大戦後の深刻な絶望感にただこの不安が極度に強勢された現象に他ならない。

(5) 「みず系」昭24・8。引用は、新潮社「安部公房全作品13」(昭48・5)に拠る。

(6) 石川淳との対談「発想とイメージ」(中央公論社「日本の文学60石川淳集」昭42・8「付録」)における安部の発言。引用は、対談集「発想の周辺」(新潮社、昭49・4)に拠る。

(7) 文学作品における例を挙げれば、これは精神分裂病ではなくコカイン使用時のものであるが、村上龍の「海の向こうで戦争が始まる」(講談社、昭52・6)の中に、次のような描写がある。
(太陽がからだの中に入り込んでくる。太陽だけではない、砂浜も海も貝もビーチパラソルの影もみんな僕の中に入り込んでくる。)

(8) 「安部公房「デンドロカカリヤ」論」(「山口国文」8号、昭60・3)。

(9) 河竹登志夫「高校時代の安部公房」(新潮社「安部公房全作品2」昭47・5「付録」)。

(10) 「H植物園」に收容される際、コモン君は、「眼を閉ぢ、まだ昇つてゐない太陽の方へ静かに両手を差しのべた」とされている。ここには、コモン君が「H植物園」を訪れたのが「まだ薄暗いころ」であったためという、時間上の理由があるわけだが、

それだけにとどまらず、指の中の「熱い太陽」に快さを感じていたコモン君も、精神病院とも見なされる「H植物園」に收容されてしまつては、かつての快感を失い、「まだ昇つてゐない太陽の方へ静かに両手を差しのべ」るほかはないのだ、と見ることもできよう。大江健三郎の小説「鳥」の、「鳥たち」の幻影に囲まれて至福を感じていた主人公が、「気違い病院」へ連行された後では、もはや「鳥たち」を呼び出すことはできず、「おれは鳥たち」さえなしで、この病院の中の退屈と汚辱にまみれる日常を耐えねばならないのだ」と考えるように、である。

○本稿における安部の諸作品からの引用は、すべて、それぞれの初出誌に拠り、引用に際して、旧字体は新字体に改めた。また、注⑩における大江健三郎「鳥」からの引用は、新潮社「大江健三郎全作品2」(昭41・8)に拠つた。

—— 本学大学院博士課程後期在学 ——